三和導代さん

MICHIYO MIWA

――本日は桜満開という、最高の取材日和にありがとうございます。

三和さんは亡くなられたご主人、高坂和導さんの志しを継がれて竹内文書を世に広めていらっしゃいますね。

三和　はい、私はアフリカを中心とした世界の秘境を巡る海外ツアーの企画と添乗をしておりますが、実はその多くの国々は竹内文書（※）と深い関わりがあるのです。仕事で海外に行けますので、実務とライフワークを兼ねて世界中を飛び回り、自分なりのフィールドワークや研究を行っています。実を申しますと、高坂が亡くなるまでは私自身竹内文書に深い関心があったわけでなく、主人が２００２年に脳溢血で急逝した後、あるきっかけがあり、彼の遺り残した竹内文書に関する仕事を引き継ぎ、自分が出来る範囲で広めていこうと決意したのです。

ガン発覚、闘病を機に竹内文書の普及を決意！

――どういったきっかけが三和さんを動かしたのですか？

三和　２０１１年に体調不良を覚え病院で検査をしたところ、最初は胃潰瘍と診断され、完治したとたん、今度は胃ガンが見つかったのです。しかし、ガンになってしまった原因を自分自身で実は気づいていたのです。高坂が亡くなった後、彼の遺していった膨大な竹内文書の資料や文献、途中まで終わっていた「竹内文書」に関する翻訳本の原稿など、様々なことがすべて宙ぶらりんになってしまっていて、その続きを終わらせなくてはと思っていたのですが、添乗員として海外と日本を行き来しながら日々忙しく過ごしていましたし、竹内文書は私にとってはあまりにも壮大過ぎる宿題なのでついつい先延ばしにしてしまっていました。やりたいのに、やらなければいけないのに、手をつけていないというその葛藤が恐らく自分の中で少しずつストレスを溜め込んでいったのだと思います。人間は気がかりなことや迷い、不安、心配などを胸の中に溜めているとそれが徐々に体に蓄積し、変調をきたしてくるのだとそのとき痛感しました。結局、胃ガンが出来た場所が難しく、胃の全摘出手術を受けました。お陰様で手術は成功し、その後、抗ガン剤

「竹内文書」研究の第一人者だった故・高坂和導氏。

人生はすべて不思議な“ご縁”と“お導き”。世界中を旅しながら、超古代史「竹内文書」を世に広める道先案内人

添乗員としてアフリカ中心に世界各国を飛び回りながら、竹内文書の研究家として知られた故・高坂和導氏の妻として、竹内文書を世界へ広めるために様々な活動をされている三和導代（みわみちよ）さん。また、竹内文書が繋いだ不思議なご縁で江本勝会長と出会い、それをきっかけに長年国際波動友の会会員様としてもご支援をいただいております。今年3月、ヒカルランドより「ヴィジュアルガイド竹内文書」を上梓されましたので、今回は、竹内文書に記されている日本のお役目、日本人の使命、そして、今後三和さんが行っていきたい夢や目標など幅広くお話いただきました。

※「竹内文書」…神代文字で記された文書を武烈天皇の勅命により武内宿禰の孫の平群真鳥が漢字とカタカナ交じり文に訳したとする写本群と、神代文字の刻まれた石、鉄剣など、一連の総称で、いわゆる古史古伝の書物。代々秘蔵してきた皇祖皇大神宮の第６６代目の管長、竹内巨麿（たけうちきよまろ）が、1928年（昭和3年）3月29日に文書の存在を公開した。その後、原本は 裁判に提出されたが、東京大空襲で焼失したとされる。

を使いたくなかったので、静岡県三島市にある吉村眼科内科医院の高濃度ビタミン療法や、横浜の萩原優先生（「ＩＨＭ　ＷＯＲＬＤ」２０１３年12月号にインタビュー記事掲載）の「７１４Ｘ」という免疫療法や退行催眠療法などを組み合わせて、ガンを治すことが出来ました。ガンという病はつくづく自分の感情や心の在り方が作り出してしまうものだとその時実感しました。この闘病体験によって自分の中の迷いがすべて吹っ切れて、内面にも大きな気づきが生まれました。そして、高坂の遺した「竹内文書」研究を引き継ぎ、この世界に広めていこうと腹を決めたのです。

――三和さんは「国際波動友の会」会員様としても長年ご支援をいただいていますが、入会のきっかけは？

三和　これがとても不思議なのです。２００２年10月17日に高坂が急逝し、彼が執筆した竹内文書の本の英語版の翻訳が上がっていて、海外の出版元を探していたのです。特にツテがあるわけでありませんし、「さぁ、どうしよう？」と困っていたときに、アメリカのロスアンジェルスで歯科医をされている日本人がいらっしゃって、その方がまず頭に閃いたのです。彼女に相談し、原稿を送ったのですが、残念ながらその方が急逝されてしまったのです。そして、高坂が生前、江本先生が編集主幹をされている「月刊ＨＡＤＯ」（現・「ＩＨＭ　ＷＯＲＬＤ」）で高坂が他界した年の９月号・10月号に特集していただいたことを思い出し、きっと江本先生ならば、海外にも強くて色々な人脈をお持ちだろうと思ったのです。「江本先生ならば何かよいヒントをくださるかもしれない」と思って、そのときは面識がなかったのですが、ちょうど２００４年11月に日本青年館で「第一回・生命の水フェスティバル」という大きなイベントが開催されることを知って、早速参加することにしました。しかし、主宰である江本先生はそのときはとてもご多忙で直接お話する時間がありませんでした。そんな時、会場に江本先生の結晶写真も登場する映画「What's A Bleep Do We Know?!」（邦題：「超次元の成功法則」）の制作者であるウィリアム・アーンツ氏がいらっしゃったので竹内文書

『ヴィジュアルガイド 竹内文書』(DVD付)
高坂和導＋三和導代 著
定価1,800円＋税　ヒカルランド刊

すべての文明は、超古代日本から始まった！宇宙から飛来したスメラミコトは天空浮船で地球を統治していた！ 驚愕の超古代史を記す竹内文書を世に知らしめた高坂和導氏の生涯を注いだ渾身の研究内容が今明かされる。我々日本人の役目を知り、世界との繋がりを理解し、世界平和を叶えるための必読の書。

の英語版を1冊お渡ししました。

その後、ウィリアム・アーンツさんが江本先生に「実は日本に今回来る前に、ある精神世界の方から、近いうちに本当の世界の歴史が分かるようになりますよ、と言われたのです。このことだったのですね」と早速連絡をとってくださいました。その後、今度は江本先生から直々にご連絡を頂戴しました。そして会社にうかがい、竹内文書の翻訳版のご相談をしたところ、たくさんの出版社を紹介していただき、結局メキシコでのスペイン語版の出版へと漕ぎ着けることができたのです。本当に嬉しかったですね。江本先生にはとても感謝しています。そういえば、江本先生は「本物に出会うと鳥肌が立つ」と日頃おっしゃっていますが、竹内文書の高坂の本を見たときも鳥肌が立ったとおっしゃっていました。江本先生流の体内センサーが働くんですね。やはり竹内文書は本物なのだと再確認しました。

江本先生とはそれからのお付き合いになりますが、その後も色々な形で国内外に竹内文書を広めるためのアドバイスなどをいただいたり、ご尽力いただいております。その後、メキシコマヤツアーのコーディネートなどツアーアレンジもさせていただいたりしております。

魂の道に沿えば必要な時に必要な額は入る

――高坂和導さんが竹内文書の翻訳版出版に関しても背中を押してバックアップしてくれたのでしょうね。

三和　それは本当にそうだと思います。実際、高坂が亡くなってから様々な不思議なことが起こり、シンクロの連続だったのです。必要な時に、必要なモノや人がすぐに送られてくるという状況が何度もありました。これはきっと彼からのメッセージだと感じました。

たとえば、去年に竹内文書を分かりやすく解説するアニメーションDVDを作ろうと思い立ち、制作会社にお願いしました。映像制作は私個人のポケットマネーですので、2回払いの支払いを「さぁ、どう工面しようか」と考えていたのですが、何と2回とも支払い日の前に必ずどこかからお金が準備され、通帳の残金はゼロになってしまうのですが、きちんと支払うことが出来たのです。これは不思議な体験でした。天の配剤なのでしょう、必要な時に必要な額だけタイミングよく準備されてくる。「あ～、私も生活があるからもう少し余分にお金が振り込まれていればいいのに～！」とぼやきたくなりましたが(笑)、でもおつりはないようです。

資料を探しているときも「ここにある」という感覚が沸いてきて、苦労せずに必要な資料がすぐに見つかったり、竹内文書の普及を手伝ってくれる人と然るべきタイミングでご縁が繋がったり、本当に何度もそういう体験をさせていただきました。これも自分一人の力ではなく、高坂や上からのサポートが入ってくれて、すべての物事がスムーズに運んでいると感じます。

すなわち、私が今心血を注いでいる活動を、見えない力が応援してくれていると実感しています。

三和導代◆MICHIYO MIWA
青山学院大学文学部フランス文学科卒業後、学生時代に高坂和導の講演会に参加したことがきっかけで結婚。高校教諭として5年間勤務後、旅行業界に転職。海外青年協力隊でガーナに2年、NGO活動で東京とマリ共和国に4年間往復を重ねる。現在は海外の秘境旅行専門の旅行企画・販売・添乗業務に携わり、アフリカ中心に世界各国の秘境ツアーに飛び回る日々。一方、2002年、夫の高坂和導が他界してから、彼の遺した竹内文書の英語版の翻訳を完成、また、メキシコのスペイン語版「TAKENOUCHI DOCUMENTS」を上梓。2011年の闘病体験から竹内文書の普及をライフワークとし、講演、執筆、映像制作など多岐に渡る活動をし、世界中へ広めている。
ウェブサイト◆http://www.takenouchi-documents.com/

また、こういう体験からも竹内文書は真実の歴史であり、自信を持って世界に紹介できると確信したのです。

自分が今在ることにも周囲にも、愛感謝の想い！

――それはかなり強力なサポートが入っていますね（笑）。羨ましい限りです。竹内文書の普及をされ始めてから、ご自分の心持ちや感情も変化されたとか？

三和　はい、私の仕事は添乗員ですので、色々なお客様がいらっしゃいます。昔はいわゆるクレーマーのうるさいお客さんがいると「あ～、このお客さんは苦手！」と思ってしまうときもあったのですが、今では、皆様がお金を払ってくださってこのツアーに参加してくださっている。その貴重な浄財で私は自分のライフワークである竹内文書の普及が続けていける。そして、今回このツアーで出会ったのも何かのご縁に違いない、と思えるようになりました。そう考えると、心の底から愛感謝の念が沸いて来ます。また、こちらがそういう想いでお客様に接すると、不思議と相手もこちらにそういう愛感謝の想いで好意的になってくれるのです。自分の意識が変われば周囲も変わる。江本先生もよくこうおっしゃっていましたが、まさにその通りだと思います。常に周囲の人々に対しては「ありがとう」という感謝の心で接するようにしています。自分の意識や想念は現実化しますし、相手からも同じ波動が返ってくると思うので、ポジティブな想いを発信し合い、ポジティブなエネルギーを循環させていきたいです。すべては意識だと思います。

――三和さんの本職が海外旅行の添乗員というのも竹内文書を世界に広めるためには素晴らしいお仕事ですね。

三和　そうですね、とりわけ私は元々アフリカを中心にした秘境ツアーの企画添乗がメインですので、竹内文書に出てくる国々に直接行って、自分の目で様々な歴史の痕跡を見たり、遺跡から遥か昔の様子を想像したり、超古代を生で感じることが出来る今の仕事はとてもありがたいことです。たとえば、天皇家の御紋でもある十六菊花紋はイラクのバビロンやイスラエルのエルサレムの遺跡など世界各地で同じ文様を見ることが出来ます。自分の目で実際に見るとても感動しますし、竹内文書で書かれているように日本と世界の関わりや繋がりを実感できます。

また、竹内文書では、日本は世界の雛形であり、日本から世界中に五色人が飛来していき、またスメラミコトが世界各国に天空浮船で世界各国を巡幸するという内容が記述されていますので、正にその地に降り立ち、自分の五感でフィールドワークをさせてもらっている気分です。

――アフリカを中心に世界を飛び回っていらっしゃるとは時には危険な目に遭うこともあるのではないですか？

夫がくれた龍神様のご神水が世界の秘境でお守りに…

三和　それがありがたいことに毎回無事にツアーを終えて戻ってきています。実は、生前、青森出身の高坂が、「八甲田山の龍神様のご神水を持って世界各国に挨拶をしてきてほしい。マミーちゃん（呼び名）にはその役目があるので、それをする限り好きな国にはどこでも行かれる」と言っていました。そのときは私もあまり深く考えていなかったのですが、本当に好きな国には行くことができ、これまで無事に戻ってきていますので、きっと龍神様のパワーに守られているのだと思います。これもすべて天の御意思であり、私がこの世界でまだまだやり遂げなければならないミッションがあるのだと信じて、これからも竹内文書を世界中に地道に広めていきたいと思います。

――今年3月に、ヒカルランドから「ヴィジュアルガイド竹内文書」を上梓されましたが、読者の反応はいかがですか？

三和　おかげさまで徐々に広まっており、反響があるようです。本書の内容は高坂が「月刊ＨＡＤＯ」（「ＩＨＭ　ＷＯＲＬＤ」の前身である月刊会報誌）の中で２００６年から２００８年まで連載執筆していた内容に、私の前書きや例のアニメーションを使った解説ＤＶＤなどを加えたものですが、非常に分かりやすくまとめられていますし、竹内文書とは何かをご理解いただくにはよい入門書だと思います。是非ご一読いただけたら幸いです。